

## 誰が歴史家なのか——ラディカル・オーラルヒストリー

Just Who is a Historian? On Radical Oral History

保莉実

はじめまして、保莉と申します。なんか時間がすごくオーバーしているんで、きっちり20分で終わらせたいと思います。5分前くらいになりましたら、もしよろしければ、合図頂ければ、後半はしよりますので。みなさんお疲れだと思いますけれども。もうちょっとだけ我慢して下さい。

僕は、オーストラリアでPh.D.を取って来たんですけども、僕の研究はオーストラリアの先住民アボリジニの歴史でした。イギリスのオーラルヒストリー状況という話がありましたが、オーストラリアの場合、特にアボリジニの人々は文書を残してきませんでしたので、必然的に、オーラルヒストリーは全然違和感なく定着しています。とはいえ、その方法について言えば、僕はオーストラリアの研究状況に決して満足していないところがあって、今日はその辺の話をしたいと思います。ただその前に、これは後で重要になってくるんで、一言言っておきたいんですけども、僕は歴史学者です。「お前は人類学者だ」とよく言われるし、僕の研究方法はたしかに人類学から多大な影響を受けてきました。とはいえ、僕自身は歴史学にこだわりをもって研究をしています。

さて、「誰が歴史家なのか」というタイトルをつけました。僕自身が、Ph.D.での研究をつうじて考えてきたことを、20分で小さくまとめてみたいと思います。

僕は、オーラルヒストリーには大きく3つの方法があると思っています。ひとつは今アーカイヴを作ろうという話が日本でも出てるようで、僕は素晴らしいことだと思うんですが、そういった既に保存されているテープや文書、つまり口述記録に歴史学者がアクセスして、それを史資料として歴史研究を行う方法があります。もうひとつは、これがオーストラリアで一番盛んだし、世界的にも多いと思うんですけども、インタビュー形式のオーラルヒストリー研究です。歴史家が、自分で人に会って、そこでテープを録るなり、ビデオを撮るなりして、オーラルヒストリーを記録・分析してゆく方法ですね。さて、僕自身がこだわってやってきたのは、この2つのどちらとも違う、3番目の方法です。どういう方法かというと、僕はほとんどインタビューしないんですよ。インタビューをしないというと、ちょっと語弊があるんですけども、もちろんテープをまわす時もあるんですが、ある時間を決めてその時間のあいだに、準備した質問に対して答えてもらうということになるべくしないで、むしろアボリジニの人々が暮らすコミュニティに滞在させていただいて、一緒に生活していく中で彼らが具体的に行っている歴史実践と一緒に経験していく。そんななかで、もちろん、「もうちょっとその話聞かせてよ」といってテープをまわすことはあります。ただ、アポイントをとって、インタビュー室みたいな場所で、つまり人工的に作り出した時空間のなかで過去を語ってもらうことはせず、むしろ彼らの生活のなかで生きている歴史経験にそくして歴史と一緒に体験してゆくというスタイルをとりました。それ

を僕は、フィールドワーク形式と呼んでいます。

具体的には、僕はたぶん人類学者の方々のフィールドワークとほとんど同じことをやったんですね。つまり許可をもらってコミュニティに入って、言葉を学んで、人々と生活をともにする。あんまり好きな言葉ではないですが、要するに「参与観察」です。僕のぼあい、ダグラグというアボリジニ・コミュニティに延べ約1年、オーストラリアの奥地でうろうろしていた期間全部あわせると、たぶん2年間弱くらいになると思いますけれども、人類学者のフィールドワークとほぼ同じことをやりつつも、しかし歴史(学)にこだわった調査をしました。

そのときに、僕が考えていたこと、注意してきたことが、「歴史家は誰か」という問題でした。つまり、僕たち歴史学者がインフォーマントの話聞くのではなくて、むしろ、インフォーマント自身を歴史家とみなしたら、彼らはどんな歴史実践をしているのだろう、というふうに考えたわけです。僕は僕で歴史学者ですけども、彼らは彼らで「歴史家」であると。そういうふうに発想をかえてみると、歴史はどんなふうにみえてくるのでしょうか。さきほど、インフォーマントが1人でもいいのかというご質問があったと思いますけれども、もしインフォーマントを歴史家として考えるならば、例えば大塚久雄が社会経済史を語り、E.H.カーが歴史とは何かを語ったように、あなたの目の前にいるたった1人のインフォーマントが、その人物の歴史(観)を語ったとしても、まったく問題ないんじゃないかと思うんです。

ただしそうすると、結局何が歴史なのかということが問題になってくるんですよ。というのは、歴史家としてのアボリジニの人々が語る過去の物語ってというのは、荒唐無稽な話が次から次へと出てきて、研究者としてはどうにもならない状態に陥っちゃうんですね。ちょっとだけ、あまりたくさんは紹介できないですけども、具体例をあげます。最初に、歴史を語るとかいう前に、まずは大地の声を聴けないといけない。大地があなたにいろんなことを教えてくれるわけです。そんなことを言われたって、僕には聞こえないわけですよ。でも彼らは大地の声を聴くわけですよ。その大地の声に従って、例えば、「あそこで白人が死んだのは、法を犯したあの白人に大地が懲罰を与えたからだ」と語りますよね。そのときに、僕らはどのようにしてこのアボリジニの人が語ってくれた歴史物語を聞くのでしょうか。ここで、「ああ、アボリジニの世界観ではこの事件をそんなふうに理解するんだー。」とういような聞き方ではなくて、彼らの話を歴史家の言葉として、つまり大塚久雄やE.H.カーと同様に、歴史家による歴史分析として受けとることはできるのでしょうか。そういうふうに聴くように心がけてみるんです。

もしかしたら「大地の声を聴く」だと、なんとなく素敵なイメージなので、まだみなさんの共感を得られるかもしれませんが、もっと困っちゃうのは、例えば僕がつきあったダグラグ村のアボリジニの長老は、ケネディ大統領がこの村に来たっていうんですよ。来ているわけがないんですよ、僕は当然知っているわけです。しかし彼らには、彼らの歴史の文脈がある。これを詳細にご紹介する時間はないですが、すごく簡単にお話すると、1966年にそれまで牧場で使役されてきたアボリジニの労働者とその家族が、白人の牧場業者たちに対してストライキを宣言して、土地権運動を展開するんです。ダグラグ村に暮らすアボリジニの長老の多くは、この運動に参加し

ました。で、この土地権運動をはじめる前に、ケネディ大統領が来るんですよ。ケネディ大統領が来て、「お前たち、なんで白人にこんなひどい目にあっているんだ？」とアボリジニの人たちに聞くんですね。するとアボリジニの長老は、「実はこういうことがあって、イギリスからやってきたあいつらにひどいめにあっているんだ」と応えます。ケネディ大統領は、自分はアメリカ人のボスで、アメリカはお前たちに協力すると約束をします。「イギリスに対して戦争を起こして、お前たちに協力するよ」と言われて、それがきっかけになって、このストライキが始まるんですね。アメリカという強力なバックアップを受けて。さて、大地の声の場合もそうですが、歴史学者がこの物語を、歴史学の文脈で語るができるんだろうか、という問題が当然でできますね。

もうひとつご紹介したいのは、まだアボリジニの人々が白人の経営する牧場で働いていたときのできごとです。牧場が洪水で流されます。この洪水は1924年に起こっていて、僕は当時の新聞でもこの事件を確認しています。ただ問題なのは、この洪水が起こった原因です。レインボウ・スネークと呼ばれている神話上の大蛇がいるんですけど、アボリジニの長老のひとりが、この大蛇に雨で牧場を流すように依頼したらしいんですよ。さて、やっぱりここで、この歴史をいったい僕たち歴史学者はどういうふうに扱えばいいのかっていう問題をたてるわけです。つまり彼らが歴史家だとしたら、たんなるインフォーマントじゃなくて、彼ら自身が歴史家として、そういう歴史分析をしているとしたら、それはアカデミックな歴史学者にとってどういう意味があるのか、という問題です。

僕がPh.D.論文でやりたかったのは、「我々」歴史学者が「彼ら」インフォーマントの話を聞くという態度、あるいは我々が知っている歴史(学)のなかに、彼らの物語をあてはめるという態度、そういった歴史構築のエージェンシーとしての「我々歴史学者」を強固に保持する努力をあえて放棄してみるという作業でした。いったん、僕らのエージェンシーを括弧で括って、彼らのほうにエージェンシーを預けたときに、いったい何がおこるのか。そのときに、既存の歴史学の方法にはどんな限界がみえてくるのかっていうことを考えたいんです。そうすると、これアボリジニ世界に特に顕著なのかもしれないんですけど、学術的歴史学の立場からしてみれば、もう無茶苦茶なことになってしまうんですよ。動物は話しかけてくるは、植物は話しかけてくるは、場合によっては、石だって歴史を語りだすわけです。そうすると、もはやこれはオーラルヒストリーじゃないんじゃないか。別に口(オーラル)だけじゃないんです。いろんなモノや場所から過去の声が聞こえてくるわけです。そこで僕は、オーラルヒストリーという言い方をやめようかなと思ったときがありました。メキシコ・インディオの歴史研究をされている清水透氏は、ご自身の方法を「フィールド派歴史学」と呼んでいます。僕もフィールドワーク・ヒストリーとか、フィールド・ヒストリーとか言おうかなと思ったんです。でも半年くらい前に、酒井順子さんにお会いしたとき、「オーラルヒストリー」ということを、ゆるやかに広く考えていいんじゃないかっていうふうにおっしゃってくださって、それだったら、オーラルヒストリーという文脈だったら、僕がやろうとしていることは、過激で極端なオーラルヒストリーなんじゃないかっていうふうに考えて、今回ラディカル・オーラルヒストリーというサブタイトルをつけさせて頂い

たわけです。

アボリジニの人々が行っている歴史実践はなにかという話を、もうちょっと続けます。僕たち歴史学者は、通常「歴史」を探索しますよね。searching for history ですよね。それに対して、僕はアボリジニの人たちから学んだことってというのは、paying attention to history 歴史に注意を向けていく。つまり、僕たちが主体になって歴史を捜し求めていくのではない。というか、もう歴史というのはそこらじゅうにあるんですよ。歴史が僕らに語りかけてくる言葉に耳を傾ける。そういう歴史実践が行われていた。あるいはこう言ってもいいですね、僕たち歴史学者は、歴史を本にするわけですけども、ということは歴史を構築するわけですよ。僕たちが歴史を紡ぎ出すとか、いろんな言い方がありますが、歴史を書いていく、僕らが主体的に……なんていうか、歴史を作り上げていくということが、避けがたくあるわけです。ですけども、僕が訪問滞在したダグラグ村で行われていたことは、むしろ歴史をメンテナンスするっていう、これちょっと日本語にしづらいので困っているんですけども、歴史はそこに常にあって、それを一緒に大切にしている。みんなで歴史をメンテナンスしていく。そういう歴史実践のあり方だったんですね。さらに別の言い方をすると、歴史にディップするでもいいかもしれません。ディッピング、つまり歴史に浸る生き方、歴史に取り囲まれて暮らす生き方、そういう生き方がある。

ここで話を僕たちの歴史実践にひきつけてみたいんですけども、これはアボリジニだけの実践では必ずしもないはずなんです。僕らだって、日常生活の中で、やっぱり歴史のメンテナンスをやっているはずなんです。ただ僕らは普段これを歴史実践とは思っていない。僕たちは、歴史実践というものを、歴史学者が古文書館や研究室で行う作業だっていうふうに思いこみ過ぎているんじゃないか。もしこの思いこみが、19世紀西洋に起源をもつ近代主義アカデミズムのひとつの足枷だとしたら、それを少しづつ解いていかなきゃいけないと思うんです。時代状況がそれを要請しているんじゃないかと。

ひとまずここでまとめます。「むずかしいですよ、でも試してみる価値はあるはずだから、一緒にやってみませんか？」という気持ちで言いますが、歴史学者である僕たちが、自分たちだけが歴史家なんだという思いこみを留保すると、たぶんいろんな歴史家が僕らに話しかけてくるはず。もっと正確に言うと、歴史学者以外の多様な存在が語っている過去の声に歴史学者が気づくようになるかもしれない。とはいえ、いきなり石から歴史を聴くとか、大地の声を聴くっていうと、なかなかしんどいですよね。だからまずは、歴史学者以外のいろんな人たちが歴史家として僕らに話しかけてくる言葉に真摯に耳を傾けてみる、というのはどうでしょうか。多様な「歴史家たち」と付き合ってみる、対話してみる。倉石先生のご発表で「対話」ということが出てきましたが、そういうことも関係してくると思うんですね。

さて、ここから先はさらにやっかいなんですけども、もしかしたら、歴史学者が、歴史を探索する主体としての歴史家であることを、本当に上手に括弧で括っちゃえば、今度は「歴史」が僕たちに語りかけてきてくれるかもしれない。事実をして、文書をして、「歴史を語らしめる」っていう言い方は昔からあるようですね。それとはちょっと違う文脈なんですけど、改めて

歴史を探索する主体としての歴史学者の特権的な地位を揺さぶってみる。歴史学者中心主義っていいですかね、そういうものを一回括弧で括ってみる。そういう作業ができないだろうか、ということをお前は考えて、あれやこれや模索しています。

こういう話をする、「今までだって、そんなことやってたじゃん」と言われそうなので、もうちょっと詳しくお話ししないとけません。先にご紹介したとおり、ケネディ大統領がアボリジニの村に来たっていう歴史がありますよね。あるいは大蛇が洪水で牧場を流したっていう歴史がありますよね。通常の、と言うべきかどうかわかりませんが、素朴実証史学のなかでは、こんな歴史は、まあ排除されるわけです。なんで排除されるかっていうと、これは事実じゃないからですね。

本当はここで、「事実とは何か」という問いをちゃんと考えなきゃいけないんですけども、それだけで話が先に進めなくなると嫌なのでいったん置きます。とりあえず、こう言っておきましょう——史実性という呪縛から、歴史学は一度解放される必要があるのかもしれない。ただし、この点は慶応大学で発表したときも誤解されたようなので（僕は慶応大学の社会史ゼミで、松村先生と長年バトルやってるんです）、補足します。例えば、こういう主張があるわけです。裁判の証拠提出に使えないような歴史は、歴史学の対象にはなりえない。つまり、大蛇が洪水を引き起こしたという話は、裁判では事実・証拠として扱われそうにない。だからそれは歴史学の対象にはならない、という考え方ですね。はっきりさせておきたいんですが、僕は、裁判所の証拠提出で使えるような歴史学などやめるべきだ、なんて全然思っていないんですよ。もちろんそういう歴史学はあっていいし、そういう歴史はこれからも必要とされていくだろう。ただ僕が言いたいのは、このグローバル化の時代、西洋中心主義が執拗に批判され、近代主義の限界と疲弊が叫ばれ、多文化主義が謳われ、民族文化がどんどん越境している、今この時代に要請されている歴史学は、本当に裁判に役立つような歴史学だけなんだろうか、ということなんです。

史実性の呪縛から解放されない限り、ケネディ大統領がアボリジニの村に来たっていう歴史は歴史学者によって排除され続けるでしょう。これに対して、「僕たちは排除しないよ」というグループがいくつかあります。典型的には、記憶論をやっている人たちです。あるいは、人類学の人たちが中心ですけども、神話論というのも昔からあります。記憶論や神話論をやっている研究者たちは、たしかに排除しないんですけど、そのかわり包摂しちゃうんですね。別の言い方をすると、記憶論や神話論は、アボリジニの人たちが実際に経験したという、その経験を無毒化してしまう。無毒化するというのはどういうことかという、要するに、「それは事実じゃないけれども、でも、それはそれとして重要ですよ」と言っている（今日もずっと気になっている言葉に、「掬いあげる」というのがあるんですけども）、とにかく掬いあげるわけですよ。事実じゃないんだけど、何かそこには大切なものがあるはずだと言って掬いあげる、あるいは、尊重する。でも僕はこの、「掬いあげて尊重する」という行為の政治学を問題にすべきだと思います。尊重するとはどういうことか？ 例えば、「アボリジニの人たちは、ケネディ大統領がこの村にやってきたと信じている」と記述する歴史学や人類学は容易に可能なわけですよ。でも、これは知識関係が

平等じゃないですよ、あきらかに。尊重はしているけど、「尊重」という名の包摂は、結局のところ巧みな排除なんじゃないでしょうか。だってケネディ大統領が実際にアボリジニの長老に会ったなんて、研究者は誰も思っていないんだもん。思っていないんだけど、「それはそれとして大切にしていますよ」というジェスチャーだけはしている。これでは、僕が提起している問題の解決には全然なっていない。僕はこの尊重の政治学というものの、隠蔽された権力構造に敏感でありたいと思いますね。

じゃあケネディ大統領がアボリジニの村に来たということ、歴史学者として本当に書けるかどうか。僕は、書けると言いきるつもりはないんです。ただ、その問題を粘り強く考えていくことが、もしかしたら歴史学の新しい課題なのかもしれないと思っています。つまり、排除でも包摂でもない歴史叙述の方法はあるんだろうかっていう問いですね。そこで、これはPh.D.論文で多用した言葉使いなんですけれども、異なる歴史世界どうしが「コネクトする(接続する)」あるいは「共奏する」方法を模索してみる、というのはどうでしょう。歴史空間、歴史経験というものは、根源的に多元的なので、それはもう僕らが決して追体験できないような、理解できないような、決して埋まらないギャップが厳然としてある。それはそれでいいじゃないですか。だからこそ多元主義が謳われる昨今なんです。ただ、ギャップはあるんだけど、ギャップごしのコミュニケーションは可能なはずだって思うんですよ。つまり、「あなたは本当にあったべきごときだと思っているかもしれないが、それはじつは神話なんですよ。でもまあ、僕としては神話・記憶としてそれを尊重しますよ」ということではなくて、「あなたの経験を深く共有することはできないかもしれないけれども、それがあなたの真摯な経験であるということは分かります。だから、あなたの歴史経験と私の歴史理解とのあいだの接続可能性や共奏可能性について一緒に考えていきましょう」ということはできるんじゃないか。

そのためのヒントになるような人たちがいるので簡単にご紹介します。まず、モリス・バーマンという人が、『デカルトからペイトソンへ』(国文社、1989年)という著作の中で、「世界の再魔術化」ということを言っています。マックス・ウェーバーの言葉を借用しますが、近代化は、世界を脱魔術化していくプロジェクトとしてずっとあったと思うんですね。この脱魔術化の過程で、歴史学は多大な貢献を果たしてきた。しかし僕たちは、このように世界を世俗化していくことの暴力性とか、植民地主義とか、そういう問題が深刻に問われる時代に生きているのではないか。だから僕はむしろ、「歴史の再魔術化」の可能性を考えてみたい。僕は世俗主義が、近代主義の最後の牙城だというふうに思っています。近代の国民国家論を批判するっていうのは、わりとみんなできちゃうんですよ。ベネディクト・アンダーソンをあげるまでもなく、構築物としての国民国家なんてのは近年たくさんたくさん批判されている。それはそれで大切な作業なので、僕もそういう人たちと共に仕事をしているつもりです。ただ世俗主義の問題となると、みんな腰が引けますよね。世俗主義を超える、つまり精霊とか神様とかの世界を、私たちがもう一回リアルに引き受けることが、アカデミズムという枠組の中で果たして可能なのかどうかという問題。これ、もしかしたら、僕らに突き付けられている、さっき近代主義の最後の牙城という言い方を

しましたけれども、とつても大きな課題であるというふうに思います。モリス・バーマンという人は、その辺のことを、どうも真剣に考えているんですよ。彼の主張は大雑把だし、ユングの錬金術研究に注目したりしていて、1960年代に流行った議論の延長という印象をもたれるかもしれませんが、とはいえ整理としてはよかったですのでちょっとお勧めの本です。

次に、ウィリアム・コノリーという人、政治哲学者ですけれども、ポスト・セキュラリズム（ポスト世俗主義）ということ提唱しています。この人はまあまあ有名なんですが、この *Why I am not a secularist?* (University of Minnesota Press, 1999) という本はあんまり有名じゃないですね。そこで彼は、深い多元主義 (deep pluralism) ということを問題にしています。多文化主義や文化多元主義っていうと、通常は「いろんな文化があるのでお互い尊重しましょう」みたいな主張ですよ。でもこうした立場を擁護する人も、世俗主義っていう枠組自体は決して壊さないじゃないですか。コノリーは、そうではなくて、スピリチュアルな経験とか、宗教的な世界観なんかも排除しないで、多元主義をより深く押し進める可能性を模索する必要を訴えています。最後に *Provincializing Europe* (Princeton University Press, 2000) という本を出版したデイベッシュ・チャクラバルティという人物がいます。彼は、ポストコロニアル理論で知られた人ですけれども、この人の意見は、宗教学者のミルチャ・エリヤーデの仕事とも関係してきますが、つまりこういうものです。アカデミズムの世界で我々は世俗主義をやっている、つまり世俗的な歴史学の方法でしか研究をしていないけれども、具体的な僕らの日常世界のなかでは、精霊や神様は、やっぱりどこかで相変わらず有意義に存在している。だから、世俗主義的な歴史学の方法だけではなく、この日常世界のあり方にも意識の照準をあわせていけば、「彼らアボリジニは迷信的で、僕たちは近代的だ」っていうような単純な二項対立論にならないはずじゃないかっていうことを、*doubled consciousness* (二重の意識) という言い方で定式化しています。これもちょっと注目していいと思います。

あと5分くらいですか？ 最後に、アーカイヴの話を少ししてほしいという依頼があったので、ちょっとそんなお話を。「消えゆく声」とか「見えないもの」っていうのは、無限にあるわけですよ。多元的な諸歴史空間のなかに無限にあるわけですよ。そのなかで、例えば大地の声は、アーカイヴには保管されませんよね、たぶん。僕は、これからも大地の声を聴けないと思うんですよ。ときどき聴けたような気がするときもあるんですけど、それはそれでまづいよなあって。向こうの世界にいつちやっても困るしなあっていうところで、いつも混乱したり、立ち止まったり、考え込んだりしています。何が言いたいかという、アーカイヴがどんなに充実しても、それで終わりっていうことはないんですよ。充実したアーカイヴを作ることはすごく重要だけれども、その一方で僕たちが決して忘れてはいけないのは、アーカイヴに保管されていない何かが、必ずアーカイヴの外側にある、ということだと思いますね。だから僕自身はむしろ、アーカイヴのなかには入っていない、もしかしたら保管の対象にすらならない、そんな外れた歴史に注意を向ける研究者でありたいと思っています。要するにアーカイヴがどんなに充実しても、僕はこれからもフィールドワークを続けていこうという事です。

最初の、歴史学者としてのエージェンシーを相対化してみるというところで言いましたけれども、歴史学者以外のあらゆる存在から「歴史とは何か」を学ぶ必要があると思うんですね。それはもしかしたら、そこを歩いている人かもしれないし、自分の祖父かもしれないし、アボリジニの人々かもしれないし、うまくいくんだったら人間以外の、動物や植物や昆虫から歴史とは何かを学ぶことだってできるかもしれない。あるいは石や建物と一緒に、歴史とは何かを考えていくことだってできるかもしれない。歴史とは何かという問いを、歴史学者以外の人やモノに問いかけていく。なんていくのかな、歴史学を拓いていく可能性ってどのくらいあるんだろうか、僕はそういうことを考えたいと思っています。そういうプロジェクトを進めるうえで、オーラルヒストリーほど、有効な方法はないんじゃないでしょうか。

レジュメを書いたとき僕ちよつと怒ってたんだな、なんかここに「不毛な対立」とか変な言葉使ってますけど、記憶・ナラティヴを擁護する一派と、史実・真実を擁護する一派があつて、なんかそこで一生懸命対立しているんですけど、僕にはそれがちよつとよく分かんないですよ。ちなみに僕は、記憶・物語（ナラティヴ）派の方に押しつけられちゃうことが多いんですけど。僕は別にナラティヴを問題にしているつもりも記憶を問題にしているつもりもなくって、僕は経験を問題にしているんです。人間の歴史経験を問題にしているつもりなんです。で、人間の歴史経験を問題にする限りにおいて、記憶・物語と事実・真実との対立っていうのは、ほとんど意味を持たなくなってくると、僕にはそう感じられるんですね。

僕は、ひとつのキーワードとして、experience（経験）という語を使っています。歴史学はもう一度経験に戻らなくてはいけない—これは、僕のポストモダニズム批判です。いわゆる言語論的転回以降、歴史とはそもそもナラティヴである、ということが熱心に論じられてきました。それ自体としては面白かったんですけども、やっぱり歴史学って経験の学なんじゃないかと僕は思っています。経験に真摯であるような歴史学。真摯っていう言葉で、僕は今、faithful（誠実な）という意味とtruthful（本当の）という意味を合わせて使っています。歴史経験に真摯であるような研究方法を考えていくべきなのではないか。歴史経験に真摯であるということはつまり、牧場にケネディ大統領が来たということを誠実に考える歴史学です。歴史経験の多元性を誠実に考えられるような歴史学という意味です。だから僕は、自分が記憶論をやっているつもりも、物語論をやっているつもりもないんですね。むしろ、新しい経験主義と言ってもいいんじゃないかって思っているんです。僕は、empiricism 対して experientialism という言葉を使うこともあるんですけども、新しい経験論が、もしかしたら必要とされているのかもしれない。そういう新しい経験論に基づいた歴史学というのがあるんだとしたら、それはどんな歴史記述を可能にしてくれるんだろうか。

オーラルヒストリーくらい、こういう問題に近いところに位置している歴史学の方法はないんじゃないかって感じているんですね。オーラルヒストリーの可能性について、僕が言いたいのはそのことです。オーラルヒストリーという方法が、たんに今まであった歴史学に新しいメソッドが増えたとか、史料の量が増えたとかいう話に終わるんじゃないかって、むしろ「歴史とは



何か」っていう問題を、もう一回根源的に問いなおせるような、そういうものとしてオーラルヒストリーを捉えたら、こんな面白いことはないって思っています。どうもありがとうございました。

**司会** ありがとうございました。ラディカル・オーラルヒストリーの展望ということで、「経験」ということを中心に据えて、歴史学へのかなり重い、大きな問いかけがなされた

というふうに受けとめました。では次は、最後の発表者ですが、倉石一郎先生にお願いいたします。